

〔易林本節用集〕半食服 縵同

〔守貞漫稿〕二十九 蓋縵ハ泉カラムシ、麻ノ一種ニテ別也。縵ハカヅキ、ウチカケト訓ズレバ、ムシ

トモ訓ゼシカ、

〔骨董集〕上編下後 虫のたれ絹。

醒案するに、むしのたれぎぬといへるは、かたびらの絹を笠にぬひつけたるを、頭より身におほひて、山野をゆくに、蛭などをさけん料にせし物也。そのゆゑに虫の垂絹とはいへる也。○中略

宇津保物語流布の印本、樓ノ上ノ上ノ四に、うまにのりたるをとこわらは四人、むしたれたる人きて云々とあり、先哲の校本を見るに、むしたれたるとあるは、ぐしつれたるのあやまりとせり、むしのたれぎぬにまがふことばなれば、童蒙のためにおどろかしおくなり、

〔續世繼〕十 ふきしまのうちぎ、その女○小は大進○大は大臣家の宮づかへ人なりけるが、○中 けふ政所の京にいで給ふといひて、よそには物ともおもはぬことの、いひゑらずみえけるほどに、むしたれたるは、ざまよりやみえたりけん、ふみをかきて、京より御文とてあるを見れば、○下略

〔骨董集〕上編下後 こゝにむしたれたるは、ざまよりや見えけん、とあるは、虫のたれぎぬを著たるあひだより顔のすこし見えたるにて、それと人に見つけられたる也。これは小大進が、くま野まゐりの旅よそひのさまをいへるなりけり、これらによりて考ふれば、虫のたれぎぬは、もと虫をさけん料なれど、おほくは旅の具にもちひ、風塵をさけ、寒氣をふせぎ、又は面をかくす料にもせしなるべし、

裏書云

〔仲資王記〕元久元年十二月十日、辰刻許、鎌倉少將實朝室、前大納言信清卿女子 下向也、於中山卿三位亭有出立。○中略 其次第、先狩裝束武士十餘騎、次綾蘭笠染付蒸垂二騎、次平笠裾濃蒸垂二騎、已上雜仕半次物之類歟

平笠句絹蒸垂十騎、各著五重衣、差貫、已上女房歟 次主人興。○下略